カリフォルニア大学バークレー校C・V・スター東アジア図書館所蔵・芥川龍之介「母」原稿について

澤西祐典

一．はじめに

芥川龍之介の短篇「母」は、一九二一（大正一二）年九月『中央公論』に発表された。芥川は同年三月から七月下旬まで、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を訪れている。本作はその帰国後に初めて発表された小説で、作品の舞台は、芥川が実際に訪れた上海と蕪湖（ウーフー）である。

主人公である野村敏子は、夫の仕事で上海に赴いた直後、肺炎で赤児を亡くす。その後、蕪湖にある夫の社宅に移り住んだ敏子は、上海の旅館で隣人だった同名の女性（平尾敏子）から便りを受け取り、彼女が同じように赤児を亡くしたことを知る。その報に触れた敏子は、気の毒に思うとともに、嬉しさが込み上げてきたことを「荒々しい力」のこもった声で告白する、というのが話の大筋である。

本作は、同時期に発表された短篇「女」（『解放』一九二〇・五）などと併せて論じられ、「〈母〉は〈悪〉と隣りあわせに、〈女〉の心性のうちに住んで」[1]おり、「時には悪や罪を辞さない女人」[2]が描かれた作品の一つと評されてきたが、近年では、芥川の中国特派員としての経験が反映された作品として注目が集まっている[3]。

芥川は本作について「「母」は思ふに（三）悪し　女主人公が人の子供の死んで喜ぶ所をもつとアクションの上より書けばよろしからむか　さうすれば中々悪短篇にあらず　好短篇になる事受合ひなり」（佐々木茂作宛て書簡、一九二一・九・二〇付け）と述べ、末段にあたる第三章について不満を漏らしている。その意図に従い、単

行本『春服』（春陽堂、一九二三・五）へ収録するに際して、第三章中に放鳥のシーンを追加するなど、大幅な加筆修正を施している。

本稿では「母」原稿の紹介を行うが、当該原稿には、この放鳥のシーンがない。本文も初出誌のものと異同がほとんど見られず、詳しくは次章で報告するが、原稿の脇に「中央公論」のスタンプが捺印されていることからも、本原稿は初出誌『中央公論』に掲載するために書かれた原稿と考えられる。いわば、中国からの帰国後、最も月日を隔てていないヴァリアントといえ、その点においても貴重な資料である。

この原稿は、University of California, Berkeley（カリフォルニア大学バークレー校）のC. V. Starr East Asian Library（C. V. スター東アジア図書館，以下EALと記す）に保管されている。EALは、第二次世界大戦後、旧三井財閥から大量の和漢本を購入した[4]が、原稿はその旧三井文庫コレクションに含まれていたものである（資料番号一五四〇）。残念ながら、どのような経緯で三井財閥が「母」原稿を入手したかは、管見の限り、資料が残されておらず判らなかった。

「母」原稿の存在は、Deborah Rudolph著*Impressions of the East : treasures from the C. V. Starr East Asian Library, University of California, Berkeley*（Berkeley, California, 2007）中に、一部写真付きで紹介され、EALのデータベース[5]で検索できる状態にあったが、日本国内では「母」原稿が現存する事実さえ把握されていなかった[6]。そこで、本稿では、この原稿について可能な限り翻刻を行い、原稿、初出、初刊本等の異同を記すとともに、その過程において明らかになったことを報告する。

二．原稿について

「母」原稿は、松屋製青罫二〇〇字詰め原稿用紙[7]が使用されている。原稿用紙は台紙に張られ、簡単な製本がなされている。本文は黒色のインクで書かれ、枚数は全四五枚。原稿用紙の欄外の上部左寄りに、原稿用紙の頁数と一致する「1」から「45」までの通し番号が青色のスタンプで押印されている。その数字付近に、「中央

公論小説六」と紫色のスタンプが押印されている点も全頁共通である。

原稿用紙一枚目には、その他にも編集によると思われる書き込みが幾つかある。欄外上部右寄りには赤インクで「1－14」、「□□（二字不明）ノハート型ノカット」と書かれ、「ハート型ノカット」の横には、ハートとリボンのイラストが同じく赤インクで書かれている。これは、初出誌冒頭頁に挿入されているイラストに似ており、挿絵の指示と思われる。欄外右側中央には赤インクで「中公小説六」と書かれ、原稿用紙一行目の下部付近には「本文ポイント／間アキ十七行」と赤インクで書かれている。初出誌掲載の際の本文は十七行で組まれているので、その行間の指示と考えられる。また、題字、作者名、章番号に文字の大きさの指示が書込まれ、それぞれ「2」、「3」、「5?」と赤インクで指示がある。

二四枚目の欄外上部には、赤鉛筆で「中公小説第六ノツヅキ」、二七枚目の欄外上部に赤インクで「中公小説第六ツヅキ（完）」とあり、芥川が少なくとも三回に分けて（一－二三枚目、二四－二六枚目、二七－四五枚目）、原稿を提出したことが推測される。

また、本文の訂正部分を見ると、原稿用紙の最終行に訂正がある場合、次頁の冒頭との繋がりから別稿があったと推察される箇所が複数あった。具体的には三枚目末尾「それは姿見と並んだ窓に、ぼ」、一六枚目末尾「派手な銘仙の」、一七枚目末尾「女はさう云ふ沈」、二二枚目末尾「女のよりかか」といった訂正前の文句は次頁の冒頭と繋がっておらず、書き損じの原稿が他にあった可能性を示唆している。

訂正が数行にわたる箇所には、貼紙が施され、訂正本文が書込まれている。具体的には原稿の一〇枚目、一三枚目、二四枚目、二五枚目、二六枚目、二七枚目、三四枚目、三五枚目、四二枚目に貼り付け訂正があった。訂正前の本文に関しても、判読可能な限り、翻刻した。

三．本文翻刻

〈凡例〉

・漢字は原則として、適宜通行の字体に改め、仮名遣い

は原文に従った。

・ルビは、原稿で施されているものにのみ、ルビを施した。

・改行は、表題、署名、各原稿用紙の冒頭、章数行、及び一字下げの箇所のみ原稿に従った。

・ダッシュ記号は、三マス分引かれたものと四マス分のものがあった。頁をまたがない限り、三マス分に統一した。頁をまたぐ場合は、原稿通りに示した。

・原稿における編集記号や印などの本文以外の情報については、注記として示したが、各原稿の欄外に附された通し番号と「中央公論小説六」の判については省略した。

・原稿では、直前のマスに句読点を入れ、次のマスを空白にすることが多いが、翻字では通行の表記に改めた。但し、削除訂正などの挿入箇所で、空白を指示する記号「□」（「、□」などの形）は、「⊠」記号で翻字が用いられている場合に示した（「、⊠」などの形）。

・〔　〕は抹消された部分を示す。〔〔　〕〕は二重訂正で、〔〔〔　〕〕〕は三重訂正を意味する。

・傍線は、抹消部分の訂正や挿入のため、行間などに書き加えられた表現を示す。

・□は、判読不可だった文字を示す。

・【　】は、貼紙訂正箇所で抹消された部分を示す。〈　〉は、貼紙訂正箇所の貼紙訂正後の部分を示す。両者の間に、便宜上、改行と矢印記号「↓」を挿入している。貼紙訂正箇所は全部で九箇所、一〇枚目、一三枚目、二四枚目、二五枚目、二六枚目、二七枚目、三四枚目、三五枚目、四二枚目にある。

〈一枚目〉

母[8]

芥川龍之介[9]

一[10]

部屋の隅に据ゑた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の畳がある、――上海〔固〕特有の〔〔部屋〕二階〕旅館の〔〔〔内部〕部屋〕座敷〕二階が、一部分はつきり映つてゐる。まづつきあたりに空色の壁、それか

ら眞新しい何畳かの畳、最後にこちらへ後を

〈二枚目〉

見せた、西洋髪の女が一人、――それが皆冷かな光の中に、切ない程はつきり映つてゐる。女は其処にさつきから、縫物か何かしてゐるらしい。

尤も後〔〔は見□〕を〕は向いたと云ふ條、地味な〔〔銘仙の〕女の〕銘仙羽織の肩には、崩れかかつた前髪の〔〔陰に〕□〕はづれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄〔い〕い耳〔が〕に、ほんのり光〔を〕が透〔かせ〕つたのも見える。やや長めな揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

〈三枚目〉

この姿見のある部屋には、〔隣□〕隣室の赤児の啼き声の外に、何一つ沈黙を破るものはない。未に降り止まない雨の音さへ、此処では一層その沈黙に、単調な気もちを添へるだけである。

「あなた。」

さう云ふ何分かが過ぎ去つた後、女は〔姿見を後にした儘〕仕事を続けながら、突然、しかし覚束なさうに、かう誰かへ声をかけた。

誰か、――〔それは姿見と並んだ窓に、ぼ〕部屋の中には女の外にも、☒丹

〈四枚目〉

前を羽織つた男が一人、ずつと離れた畳の上に、〔新聞を前へ〕英字新聞をひろげた儘、長々と腹這ひになつてゐる。が、その声が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、巻煙草の灰を落したぎり、新聞から眼さへ挙げ〔た〕ようとしない。

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癖女自身の眼も、ぢつと針の上に止まつてゐる。

「何だい。」

男は〔けげんさうに〕幾分うるささうに、丸々と肥つた、口髭の短い、活動家らしい[11]顔を擡げた。

〈五枚目〉

「この部屋ね、――――この部屋は変へちやいけなくつて？」

「部屋を変へる？　だつて此処へは〔昨夜〕やつと昨夜、引つ越して来たばかりぢやないか？」

男〔はけげんさ〕の顔はけげんさうだつた。

「引つ越して来たばかりでも。――――前の部屋ならば明いてゐるでせう〔。〕？」

男は彼是二週間ばかり、彼等が窮屈な思ひをして来た、日当りの悪い三階の部屋が、一瞬間眼の前に見えるやうな気がした。――――塗

〈六枚目〉

〔塗〕りの剝げた窓側の〔〔窓〕壁〕壁には、色の変つた畳みの上に、更紗の窓掛けが垂れ下つてゐる。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵（ジェラニアム）が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町に〔は〕、麦藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なささうにうろついてゐる。……

「〔お前はあすこ〕だがお前はあの部屋にゐるの〔が〕は、嫌だ嫌だと云つてゐたぢやないか？」

「ええ。それでも此処へ来て見たら、急に又

〈七枚目〉

この部屋が嫌になつたんですもの。」

〔□〕女は針の手をやめると、もの憂さうに顔を挙げて見せた。眉の迫つた、眼の切れ〔□〕の長い、感じの鋭さうな顔だちである。が、眼のまはりの皺を見ても、何か苦労を〔経て来た〕堪へてゐる事は、多少の想像が出来ないでもない。さう云へば病的な気がする位、米噛みにも静脈が浮き出してゐる。

〔〔男は曰〕「好いで」

「ね、好いでせう。――――いけなくつて？」

〈八枚目〉

「しかし前の部屋よりは、広くもあるし居心も好いし、〔――――〕☒不足を云ふ理由はないんだから、――――〔□〕それとも何か嫌な事〔でも〕がある〔の〕かい？」

「何つて事はないんです〔れ〕けれど、……」
女は〔仕事に〕ちよいとためらつた〔が〕ものの、そ〔の〕れ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。
「いけなくつて、どうしても?」
今度は男が新聞の上へ、煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも悪いとも答へなかつた。

〈九枚目〉

部屋の中は又ひつそりなつた。唯外では〔相〕不相変[12]、休みのない雨の音がしてゐる。
「春雨やか、――」
男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寝転ぶと、独り語のやうにかう云つた。
「蕪湖(ウウフウ)住みをするやうになつたら、発句でも一つ始めるかな。」
女は何とも返事をせずに、縫〔□〕物の手を動かしてゐる。
「蕪湖〔は田舎町に違ひないが〕もそんなに悪い所ぢやないぜ。〔殊に〕それ〕第一社

〈一〇枚目〉

宅は大きいし、庭も相当に広いしするから、草花なぞ作るには持つて来いだ。何でも元は陶家花園とか云つてね、――」
男は突然口を噤んだ。いつか森(しん)とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。
「おい。」
【泣き声は〔□□□□〕急に〕ちよいと聞えなくなつた。が、すぐに又〔□□□□□〕切れ切れに続き出た。
「おい。敏子。」】
↓
《泣き声は急に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに続き〔始め〕出した。
「おい。敏子」》

〈一一枚目〉

半ば体を起した男は、畳に片肘靠せた儘、当惑らしい

眼つきを見せた。

「お〔い。〕前は己と約束したじぢやないか？　もう愚痴はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、――」

男は〔僅に〕ちよいと〕ちよいと眶を〔擡〕挙げた。

「それとも何か〔□〕あの事以外に、悲しい事でもあるの〔か〕かい？　たとへば〔友〕日本へ帰〔りたい〕りいとか、支那でも田舎へは行きたくないとか――」

〈一二枚目〉

「いいえ。――いいえ。そんな事ぢやな〔いわ〕〕くつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらしやる所なら、何処へでも行く気でゐるんです。ですけれども、――」

敏子は伏眼になつたなり、溢れて来る涙を抑へようとするのか、ぢつと薄い下唇を噛んだ。〔見れば〕見れば蒼白い頬の底にも、目[13]に見えない

〈一三枚目〉

焔のやうな、切迫した何物かが燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、――男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、――この部屋は嫌なんですもの。」

【敏子がかう云ひ切るや否や、丁度相図でもあつたやうに、今までは静かだた隣□の赤児が、息も止まりさうに泣き始めた。その時の中□男[14]】

←

《「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？何故この部屋がそんなに嫌だか、〔さ〕□〕それさへはつきり云つてくれれば、――」

男は此処まで云ひかけると、敏子の眼がぢ》

〈一四枚目〉

つと彼の顔へ、注がれてゐるのに気が〔□〕ついた。その眼には涙の漂つた底に、殆敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が〔漂つて〕閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？――それは〔男〔の〕の口から出た〕独

り男自身の疑問だつたばかりではない。同時に又〔□〕敏子が無言の内に、男へ突きつけた反〔問〕問である。男は〔思はずためらい〕敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの数秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の

〈一五枚目〉

色が漲つて来た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ気のない声を出した。

「あれは己も気になつてゐたんだ。」

敏子は男にかう云はれると、ぽろぽろ膝の上へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の暮が雨を〔白〕煙らせてゐる。その雨の音を撥ねのけるやうに、〔隣室では〕空色の壁の向ふでは、〔しつきりない〕今も亦赤児が泣き続〔□〕けてゐる。……(15)

〈一六枚目〉

二(16)

二階の出窓には〔日〕鮮やかに、☒朝日の光が当つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生へた、逆光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下〔に立つ〕にゐると、出窓はこの家を背景にした、大きな一枚の画のやうに見える。巌丈(がんじやう)な桝の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見える。その画のまん中には一人(ひとり)の女が、こちらへ横顔を向けながら、毛糸の〔啞掛け〕靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。〔派手な銘仙の〕血色の好い頬〕雨に洗は

〈一七枚目〉

れた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、――派手な〔銘〕大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや俯向きになつた、血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚い唇の上の、かすかな、生ぶ毛にも反射してゐる。

〔今は九〕午前十時と十一時との間、――〔今が〕旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。〔〔泊り客〕商用で〕商売に来たのも、〔遊〔覧〕び〕見物に来たのも、泊り客は大抵外出してしまふ。下宿してゐる勤め人たちも、勿論午までは帰つて来ない。〔〔女〕出窓にはさう云ふ沈〕その跡には

〈一八枚目〉

唯長い廊下に、時々上草履を響かせる、女中の足音〔□〕だけが残つてゐる。

〔こ〕この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づい〔たと思ふ〕て来ると、〔女は開き〕出窓に面した廊下には、四十恰好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画のやうに通りかかつた。女中は何とも言はれなかつたら、女のゐる事も気がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安〔や〕さうに声をかけた。

〈一九枚目〉

「お清さん。」

女中はちよいと会釈し〔ながら〕てから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。〔坊ち〕――坊ちやんはどうなさいました?」

「うちの若様? 若様は今御休み中。」

女は編針を休めた儘、子供のやうに微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます? 眞面目さうに。」

〈二〇枚目〉

女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村さん、――野村さんでせう、あの奥さんは?」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん? ぢや私と同じ名だわね。あの方はもう御立ちにな〔る〕つたの?」

「いいえ。まだ五六日は御滞在でございませう。それか

ら何でも蕪湖とかへ、――」

〈二一枚目〉

「だつて〔今朝〕〔御隣〕さつき前を通つたら、〔お〕御隣にはどなたもいらつしや〔な〕らなかつたわよ。」

「ええ。昨〔夜〕晩急に又、☒三階へ御部屋が変りましたから、――」

「さう。」

女は何か考へるやうに、〔〔ちよいと〕丸〔々〕丸した〕丸々した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？　此処へ御出でになると、〔すぐ〕その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに

〈二二枚目〉

病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で〔お〕御なくなりなすつたの？　道理で何にも知らなかつた。」

女は〔水々しい眼の中〕前髪を割つた額に、か〔□〕すかな憂鬱〔〔な色〕の影〕の色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯さう〔にかう云〕な眼つきになつた。

「もうそれで御用ずみ。〔さつ〕どうかあ〔ち〕ちらへいらしつて下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思はず笑ひ〔ながら、〕出した。〔〔わざと〕女のよりかか〕

〈二三枚目〉

「そんな邪慳な事を仰有ると、蔦の家から電話がかかつて来ても、内証で旦那様へ〔と〕取次ぎますよ。」

「好いわよ。早くいらつしやいつてば。紅茶がさめてしまふぢやないの〔□〕？」

女中が出窓に〔い〕ゐなくなると、女は又〔編〕編物を取り上げながら、小声に歌をうたひ出した。

午前〔九〕十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が

〈二四枚目〉(17)

取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりも、この間に下男が磨くらしい。さう云ふ沈黙が拡がつた中には、唯往来のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓〔〔々〕窓〕から、日の光と一しよにはひつて来る。

【――人のけはひに驚いた女は、ふと編物から眼を上げた。(18)】

←

《その内にふと女の膝から、毛糸の球が転げ落ちた。球は〔一つ〕とんと弾むが早いか、〔〔ころころ〕赤い〕一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出〔□〕ようとする、――と思ふと誰か一人、丁度其処へ来かかつたのが、静かにそれを〔拾〕拾い上げた。》

〈二五枚目〉

「どうも難有うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しさうに会釈〔した。〕をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

【敏子は僅かにかう云つたきり、〔〔□□□〕脂〔□〕のやうに〕脂よりも白い女の手へ、そつと毛糸の球を渡した。〔さうして、〕女に(19)】

←

《毛糸の球は細い指から、脂よりも白い括り指へ移つた。

「此処は暖かで御座い〔〔ます〕す〕ますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩しさうにやや眼を細めた。》

〈二六枚目〉

「ええ。かうやつて居りましても、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。

「まあ、〔御〕御可愛いたあたですこと。」

【女は〔〔急に〕思はず〕妙に敏子の顔へ、目をやる〔事が〕出来なくなつた。

「あんまり暇なものですから、――二年ぶりに編針を

持つて見ましたの。」
「私なぞはいくら暇でも、怠けてばかり居り】
←
《敏子の声はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと眼を〔伏せた。〕外らせた。
「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。――あんまり暇なものですから。」
「私なぞはいくら暇でも、怠けてばかり居り》
〈二七枚目〉[20]
ますわ。」
女は〔編物〕籐椅子へ編物を〔のせ〕捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。
「お宅の坊ちやんは、――坊ちゃんでございましたね？
――何時御生れになりましたの？」
敏子は髪〔を〕へ手をやりながら、ちらりと女の【顔を眺めた。〔何時か〕昨日は泣き声にも堪へられなかつた、あの隣室の〕昨日は泣き声を聞くのにさへ〔〕も、
☒堪へられない気がした隣室？〜〜〜[21]赤】
←
《顔を眺めた。昨日は泣き声を聞いてゐ〔る〕るのも、堪へられない気がした隣室の赤〔子〕児、――》
〈二八枚目〉
―それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、反つて〔悲〕苦しみを新たにするの〔は〕も、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前〔に〕では動けないやうに、〔〔苦痛〕悲しみ〕敏子の心〔が〕も何時の間にか、〔悲〕苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？　それとも又〔〔□〕傷口を開いてまでも〕悲しみ〕手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、〔悲〕いやが上にも〔悲〕苦し〔みを求める〕まねばやまない、病的な
〈二九枚目〉

心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ気色を見せた。しかしすぐに眼を挙げると、気の毒さうにつけ加へた。

「御宅では〔飛〕とんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ。肺炎になりましたものですから、――ほんとうに夢のやうでございました。」

〈三〇枚目〉

「それも御出て匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかり〔〔ま〕□〕ませんわ。」

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つてゐる。

「私なぞはそんな目にあつたら、まあ、〔ど〕どうするでございませう？」

「一時は随分悲しうございましたけれども、――もうあきらめてしまひましたわ。」

二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。

〈三一枚目〉

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を続け出した。

「内地はよろしうございますわね。気候も〔此処〕こちら程不順ではなし、――」

「参りたてでよくはわかりませんけれども、大へん雨の多い所でございますね。」

「〔女は〕今年は余計――〔ア〕あら、泣いて〔ゐるやうで〔女は〕(ガ)ござ〕居りますわ。」

〔〔女は〕女は〕〔聞き耳〕

〈三二枚目〉

女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もう其処へはさつきの女中が、ばたばた上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤児を抱きそやして来た。赤児を、――美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり〔見える〕出した赤児を、――敏子が内心見まいとしてゐた、丈夫さうに

頤の括れた赤児を。

〈三三枚目〉

「〔まあ〕私が窓を拭きに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましなすつて。」

「どうも憚り様。」

女は〔〔まだ〕もう〕まだ慣れなさうに、そつと赤児を〔抱き〕胸に取つた。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳〔臭〕の臭ひを〔嗅いだ〕感じた。

「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」

〔〔女は〕殆〕やや上気した女の顔には、絶え〔ず〕間ない微笑が

〈三四枚目〉

満ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訣ではない。しかし、――しかし〔こ〕その乳房の下から、――張り切つた母の乳房の下から、〔湧き上つて来〕汪然と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつたのである。

三

【〔□〕窓掛けを絞つた二階の窓は、庭木の梢と向き合つてゐる。庭木は、――大きな槐（えんじゅ）や柳は、〔□□□□〕固まつた緑の中に、(23)】

←

《窓掛けを絞つた二階の窓は、庭木の梢と向ひ合つてゐる。ぼんやり固まつた緑の中に、節高（ふしだか）な枝がさし曲つた、槐（えんじゅ）の梢と向ひ合つてゐる。敏子は〔その窓〕其処に〔よりかかり〕肘をかけ〕佇みながら、も》

〈三五枚目〉

う暮色が動き出した、木の多い庭を眺めてゐる。その仄かな襟足が、後れ毛も戦がせない所を見ると、何時の間にか微風は吹きやんだらしい。が、その中形の湯帷子の肩が、かすかな、――殆有無さへ疑はしい程、かすか

な薔薇色に煙つてゐるのは、どう云ふ外光の加減であらうか？

【庭木の梢を隔てた空には、丁度砧によく似た音が、さつきから谺を起してゐる。それはこの〔□〕辺の支那の女が、庭の外〔に開いた沼へ〕の沼で洗濯を】

←

《庭木の梢を隔てた空には、支那では洗濯をする時に使ふ、砧のやうな棒の音が、寂しい谺を〔起し〕響かせてゐる。その音の起る所〔に〕へ行けば、きつ》

〈三六枚目〉

と水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、蹲つてゐるのに相違ない。

「おい、〔お〕御前にも手紙が来てゐるぜ。」

敏子は静かに振り返つた。

〔男は〕男は紅木の机の前に、楽々とあぐらをかいた儘、〔何〕手紙や〕長さうな手紙を披いてゐる。その後の白壁には、表装もしない石刷の聯が、無造作に鋲で貼りつけてある。

「さう。――〔何処にあつて〕これ？」

敏子は机の側に坐ると、〔何本かの〕其処にあつた手紙を取

〈三七枚目〉

り上げて見た。手紙は水色の封筒の上に、〔□用な〕拙ないペンの字〔が〕を走〔つ〕らせてゐる。

「誰だい、平尾敏子と云ふのは？」

〔男はかう云ふ間でも、やはり手紙を読み続けてゐる。〕男は手紙を読み続けながら、☒どうでも好いやうな尋ね方をした。

「御〔奥の〕隣りの奥さん。あの上海の宿屋〔の〕にゐ〕にゐた、――」

何分かの沈黙が過ぎ去つた後、敏子は手紙を拡げたなり、〔突然男に〕妙に震へてゐる声をかけた。

「あなた。」

〈三八枚目〉

「え？」

〔男は手紙を巻き返してゐる。〕
「あの方の赤ちゃんもなくなつたん〔で〕ですつて〔？あんなに丈夫さうな赤ちゃんも、――――〕。」
男は〔驚いた顔を上げた。〕手紙を巻き返しながら、〔驚いたらしい〕前よりも日に焼けた顔を向けた。
「なくなつた？　何で？」
「風邪ですつて。あんなに丈夫さうな赤ちゃんでも。」
敏子は〔蒼白い顔〕憂鬱な眼をした儘、ぢつと手紙に見入つてゐる。
「始は寝冷え位の事と思ひ居り候――――で
〈三九枚目〉
すつて。」
「そりや気の毒だな。」
男はちよいと頭を振ると、机の上の鑵の中から、巻煙草へ一本火をつけた。
「病院へ入れ候時は、もはや手遅れと相〔□〕成り、――――ね、好く似てゐるでう？　注射を致すやら、酸素吸入を致すやら、いろいろ手を尽し候へども、――――」
敏子は熱心に読み続けた。
「手を尽し候へども、――――それから何と読
〈四〇枚目〉
むのかしら？　泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分程前には遂に息を引き〔と〕取り〔候〕。」――――」
敏子は〔ほつと〕かすかな〔息をついた。〕身震ひをした。
「息を引き取り候。〔私の〕その時の私の悲しさ、重重御察し下され度、――――さぞねえ。」
男は何とも口を入れずに、壁に貼つた聯を眺めてゐる。
蒼茫海水溶江水、羅列他山助我山。――――さう云ふ大字の並んだ側には、板橋鄭燮と云ふ落〔□〕款がある。
〈四一枚目〉
「それにつけても、何時ぞや御許様に御眼にかかりし事なぞ思ひ出され、あの頃は御許様にもさぞかし、――――ああ、いや、いや。」
敏子は手紙を投げ捨てると、神経的に濃い眉をひそめ

た。
「ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」
「いやになつたつても仕方がない。どうせ生者必滅なんだ。」
男は煙を〔□〕吐き出しながら、寧ろ冷かにかう云つた。

〈四二枚目〉
〔云つた。〕
「それでも〔余り〕あんまりひどすぎるわ。赤ん坊に罪でもありはしまいし。」
敏子は力が抜けたやうに、畳へ片手ついたなり、其処に落ちてゐる手紙の上へ、もう一度〔眼〕暗い眼を落した。と思ふとその眼から、突然涙が〔頬〕膝へ垂れた。
【男はちらりと妻を見た。が、それ□□何も云はずに、〔茶ぶ台の前から体を〕机の前に据ゑた体を起した。さうしてさつき敏子がゐた、[23]】
←
《男はちらりと敏子を見た。が、それには何とも云はずに、やはり煙草を吹かしてゐる。
「あなた。」》

〈四三枚目〉
又何分かの沈黙の後、かう云ふ声が聞えた時に〔は〕も、敏子は〔頬杖をついた男に、〕まだ拗ねたやうに、〔泣き濡れ〕蒼ざめた横顔をそむけながら、〔悲しさうに〕空間の何処かを眺めてゐた。
「何だい？」
「私は、――私は悪〔い〕いんでせうか？〔〔御隣り〕平〕平尾さんの赤ちやんのなくなつたのが、――」
男は火のついた煙草の先から、女の横顔へ眼を移した。
「なくなつたのが嬉しいんです。」

〈四四枚目〉
敏子〔は〕の声には今までにない、荒々しい力がこもつてゐる。
「御気の毒だと思ふ〔の〕んですけれども、――それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては悪いんでせうか？あなた。悪いんでせう〔〔□〕か、〕か？〕か、☒私は？」

男は煙草を啣へた儘、もう一度何とも〔考〕答へなかつた。何か人力〔〔に〕の〕に及ばない物〔〔と、〕に、〕が、〔黙〕厳然と前へでも塞がつたやうに。

庭木の梢が暮れか〔た〕かつた空には、砧に〔よく〕紛ひ

〈四五枚目〉

〔似た〕さうな棒の音が、寂しい谺を〔□〕響かせてゐる。その音の起る所へ行けば、きつと水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、〔〔〔□〕夫の〕今でも〕夫の服か子供の服〔を濯〕の洗濯をしてゐるのに相違ない、

……

四. 校異

EAL所蔵「母」原稿、『中央公論』第三六年第一〇号（第四百号記念号、一九二一・九）の初出本文、初刊本『春服』（春陽堂、一九二三・五）及び『芥川龍之介集』（新潮社、一九二五・四）収録の本文を校合し、校異を示した。

〈凡例〉

・頁数については①、②、③という形で、原稿用紙の頁数を示した。

・〔原〕は原稿、〔初〕は初出、〔単〕は初刊本『春服』、〔集〕は『芥川龍之介集』収録の表記を表す。

・『春服』と『芥川龍之介集』収録の本文には、原稿や初出本文でルビが施されていない漢字にも振り仮名が付されているが、その異同については省略した。

・旧字は新字に改めた。よって字体の異同は省略した。また、同字等の異同も省略した。

・ダッシュ記号の長短の異同は省略した。

・すでに述べた通り、三章については初刊本『春服』に収録に際して、大幅な改稿がなされている。そのため、「三」について、ここでは原稿と初出の異同のみを示した。『春服』と『芥川龍之介集』との異同については、『芥川龍之介全集　第八巻』（岩波書店、一九九六）の「後記」に報告があるので参照されたい。

②〔原〕地味な銘仙羽織の肩　〔初〕〔単〕〔集〕地味な銘仙の羽織の肩
同〔原〕光が透つた　〔初〕光が透のた　〔単〕〔集〕光が透いた
③〔原〕覚束なさうに　〔初〕〔単〕〔集〕覚束なささうに
⑦〔原〕〔初〕多少の想像が　〔単〕〔集〕多少想像が
同〔原〕いけなくつて?」　〔初〕いけなくて?　〔単〕〔集〕いけなくて?」
⑧〔原〕〔初〕あるかい?　〔単〕〔集〕あるのかい?
⑨〔原〕〔初〕ひつそりなつた。　〔単〕〔集〕ひつそりになつた。
同〔原〕独り語　〔初〕〔単〕〔集〕独り言
⑩〔原〕〔単〕〔集〕「おい。敏子。」　〔初〕「おい。敏子」
⑪〔原〕帰りい　〔初〕〔単〕〔集〕帰りたい
同〔原〕〔初〕〔単〕ないとか——　〔集〕ないとか、——
⑬〔原〕〔初〕そんなに嫌だか、　〔単〕〔集〕そんな嫌だか、
⑯〔原〕〔初〕〔単〕背景にした、　〔集〕背景にして、
同〔原〕毛糸の靴足袋　〔初〕〔単〕〔集〕小さな靴足袋
⑰〔原〕午までは帰つて　〔初〕午まで帰つて　〔単〕〔集〕午後までは帰つて
⑲〔原〕御休み中　〔初〕〔単〕〔集〕お休み中
㉔〔初〕〔原〕拡がつた中には、　〔単〕〔集〕拡がつた中に、
㉕〔原〕難有う　〔初〕〔単〕〔集〕有難う
㉖〔原〕〔単〕〔集〕談笑し合つた。　〔初〕談笑し合つた。」
同〔原〕〔初〕〔集〕外らせた。　〔単〕外らせた、
㉗〔原〕〔初〕ましたね?——　〔単〕〔集〕ましたわね?
㉘〔原〕〔単〕〔集〕するのも、　〔初〕新たにするも、
同〔原〕〔初〕〔単〕苦しまねばやまない、　〔集〕苦しまねばならない。
㉙〔原〕〔初〕〔単〕ございましたつてねえ。　〔集〕ございましたねえ。
㉚〔原〕〔初〕御出で　〔単〕〔集〕御出て
㉛〔原〕〔初〕〔単〕参りたてでよくはわかりません　〔集〕参りたてはよくわかりません
㉜〔原〕〔初〕括れた赤児を。　〔単〕〔集〕括れた赤児を!

㉝〔原〕〔単〕〔集〕なすつて。〔初〕なすつて。
㉞〔原〕〔単〕〔集〕しかし、――しかしその乳房〔初〕しかし、――その乳房
㉟〔原〕棒の音〔初〕捧の音
㊲〔原〕御隣りの〔初〕御隣の
㊺〔原〕夫の服か子供の服の洗濯をしてゐる〔初〕薄暗い水に浸つた布を打ち続けてゐる

五．解題

翻刻や校異の過程で気がついたことについて、簡単に記す。まずルビについて、初出誌に施されているものは、すべて原稿でルビが指定されていた。具体的に挙げると、②「切ない」（〇の中の数字が原稿用紙の頁数、以下同様）、⑤「けげんさう」、⑥「天竺葵」、⑨「蕪湖住み」、⑩「森とした部屋」、⑪「眶」、⑬「何故」、⑯「巌丈」、「一人」、⑳「蕪湖」、㉑「昨晩急」、㉒「御用ずみ」、㉔「下男」、「毛糸の球」、㉕「脂」、「括り指」、㉖「御可愛いたあた」、㉙「沾んだ眼」、㉞「節高」、「槐」、㉟「衍」、㊱「紅木」、「後」、㊲「拙ない」が、上記の通り、読み仮名や傍点が付されていた。すべて本文と同じ黒インクであったため、芥川による指定と推察される。

次に本文の訂正箇所から考えられることだが、作中に登場する二人の母親が鏡像関係にあることは先行研究で指摘されている[25]。名前が同じ「敏子」であり、境遇が似ている上に、作中で何度も姿見が強調されている。原稿の訂正箇所を見ても、二人の対構造は意図的に描かれているのが、確認できる。原稿十六枚目から十七枚目にかけて、二人目の敏子が登場する場面で、訂正前は「女は敏子よりも若いらしい。派手な銘仙の」と書き出され、この中の「派手な銘仙の」は途中で「血色の好い頬」に改められ、さらに全体が「雨に洗はれた朝日の光は」と訂正され、全く異なる書き出しとなった。その直後の「派手な大島の羽織」とあるところも、初めは「派手な銘」とされていて、主人公である敏子が「地味な銘仙」を羽織っていたのと対をなす表現になっている。最終的には銘仙羽織が大島紬に変更されたことで、赤児を失った母と赤児がいる母という境遇の差が着物の種類で表現され

る形となったが、訂正前から「地味な銘仙」と「派手な銘仙」という対比の意図が読み取れる。

次いで、二人の母親が出遭い、子供と対峙する場面（原稿二八枚目）だが、この場面では五箇所で「悲」という字が書きだされた後、削除されているのは注目に値する。前後と合わせて引用する（引用の表記は「本文翻刻」の〈凡例〉に準じた）。

昨日は泣き声を聞いてゐ〔る〕るのも、堪へられない気がした隣室の赤〔子〕児、――――それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、反つて〔悲〕苦しみを新たにするの〔は〕も、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前〔に〕では動けないやうに、〔〔苦痛〕悲しみ〕敏子の心〔が〕も何時の間にか、〔悲〕苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？　それとも又〔〔□〕傷口を開いてまでも〕悲しみ〕手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、〔悲〕いやが上にも〔悲〕苦し〔みを求める〕まねばやまない、病的な心理の一例であらうか？

訂正前と比較すると、主人公の敏子が赤児に対峙した際に抱く感情は、「悲しみ」ではなく、痛みを伴った「苦しみ」として表現されている。ここでは、敏子の抱いた感情は、コブラを前にした小動物の心理や手負いの兵士が傷口の開くのも嫌わず、一時の快楽を貪る病的な心理と並列されている。その兼ね合いから、「悲しみ」が「苦しみ」に変更されたと考えられるが、表現を変えた結果、敏子が抱く感情が単なる感傷でなく、〈母〉として生理的に逃れがたいものであると印象づけられている。

また、〈母〉に対して〈夫〉側についても気になる訂正がある。原稿四二枚目の貼付訂正を見ると、「男はちらりと妻を見た」（傍線引用者、以下同じ）と書かれていたのが、訂正後では「男はちらりと敏子を見た」となっている。「妻」から「敏子」への変更は、表現の統一という点で、興味深い。作中で確認してみると、この部分

以外では「妻」という言葉は、たった一度しか出てこない。原稿用紙一一枚目の「震へる肩、濡れた睫毛、――男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた」の部分で、敏子に女としての美を見出す場面である。しかし、その敏子が〈母〉としての感情を発露させた時には、「何か人力に及ばない物が、厳然と前へでも塞がつたやうに」感じる。敏子の中に〈妻〉でも〈女〉でもなく、〈母〉を見出した時、夫の眼にはそれが人智を超えたものとして映る。「妻」という表現が原稿四二枚目で回避されたことで、その効果がいっそう高まったと考えられる。

続いて、原稿と初出の異同についてだが、その多くは編集時の誤りや訂正と思われる。しかし、芥川が修正を加えたと考えられる箇所が二箇所ほどある。

一つ目は、原稿用紙一六枚目、二章の冒頭で、まだ子供が健在の方の「敏子」が編み物をしている場面である。原稿では編んでいるものが「毛糸の靴足袋」になっているが、初出時には「小さな靴足袋」に変わっており、彼女が赤児のために編み物をしていることが強調されている。この異同は表現の変更のため、編集の判断とは考えづらく、原稿提出から雑誌発行までの間に芥川が手を入れたと考えられよう。

二つ目は、作品末尾の一文である。「庭木の梢が暮れかかつた空には、砧に紛ひさうな棒の音が、寂しい谺を響かせてゐる。」と書かれているあと、原稿では、

その音の起る所へ行けば、きつと水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、夫の服か子供の服の洗濯をしてゐるのに相違ない、……

となっている（傍線は引用者、以下同様）。この部分が、初出の表記では、

その音の起る所へ行けば、きつと水際の芦の中に、耳環を下げた女が一人、薄暗い水に浸つた布を打ち続けてゐるのに相違ない、……

に改められている。両者は、洗濯をするという行為にお

いては同じだが、原稿段階の方が「耳環を下げた女」が配された芥川の意図が鮮明である。

この第三章は「洗濯をする時に使ふ、砧のやうな棒の音」で始まり、末尾も同じ洗濯の場面で締めくくられている。つまり、「三」全体がこの「寂しい谺」で貫かれている。鈴木論文（註（3）参照）では、この構造に着目し、「母」を「敏子が枠によって抑圧されている様子が強調された陰鬱な作品」としている。

その洗濯物が「夫の服か子供の服」であったことは、「耳環を下げた女」が二人の敏子と同じ〈母〉であったことをはっきりと示している。原稿から初出への表現の変更は、「耳環を下げた女」が〈母〉であることは読解可能とし、直截な表現を避けたと推測されるが、鏡像関係にある二人の〈母〉の外に、さらに別の〈母〉が配されることで、合わせ鏡のように〈母〉という存在がどこまでも広がっていく構造をもった作品であることが、「母」原稿から読みとれる。「耳環を下げた女」が〈母〉であることが明かされて作品が終わることで、夫からは「何か人力に及ばない物」として映る〈母〉が、作品を超えて広がってゆくことになる。

原稿用紙三五枚目での貼付訂正前の本文では、この「耳環を下げた女」は「この辺の支那の女」と表現されている。「耳環を下げた女」は現地の中国人女性を念頭に置かれたと考えられるが、作品末に「この辺の支那の女」が配されているのには、実際に現地を訪れた芥川の、現地の中国人女性に、日本人女性と同じ〈母〉を見出した実感が現れているとも考えられる。さらに、砧の音を想起させる原始的な洗濯風景は、時代や国を問わず、〈母〉は〈母〉であることを感じさせる静かな幕引きといえる。

しかし、すでに述べたように、この「三」章には大幅に加筆がなされ、その結果、洗濯の「寂しい谺」の描写はすべて削除された。改稿は、中国から帰国して一年半以上経って発表されたもので、この改稿によって、〈母〉の普遍性という主題は薄れている。換言すれば、「母」原稿は、中国からの帰国後、もっとも時を隔てていない文章であるため、芥川が到達したコスモポリタン的視点を顕著に示しているテクストといえる。原稿から考えるに「母」は、海を越えて存在する〈母〉という存在を描

くことを企図して書かれた作品だったのではなかろうか。

以上、簡単ではあるが「母」原稿についての考察を述べてきた。筆を擱くにあたり、EALで貴重な原稿を調査させていただく際、様々な便宜を図っていただいた他、貴重なご意見を賜ったマルラ俊江氏に、心より感謝いたします。

註

（1）三好行雄「宿命のかたち――芥川龍之介における〈母〉――」（『芥川龍之介論』筑摩書房、一九七六）

（2）平岡敏夫「〈母〉を呼ぶ声――「南蛮寺」から「点鬼簿」まで――」（『芥川龍之介と現代』大修館、一九九五）

（3）鈴木暁世「芥川龍之介『母』の〈透ける耳〉描写における漱石の影響――中国特派員体験と聴覚――」（『阪大比較文学』二〇〇五・八）、関口安義「芥川龍之介「母」論：人力に及ばないもの」（『社会文学』二〇一二・五）、姚紅「芥川龍之介「母」試論：近代中国の都市表象を視座として」（『文学研究論集』二〇一三・二）などがある。

（4）三井財閥は一九一八年に公式にコレクションの収集を始め、戦後の財閥解体に際し、秘密裏にEALに売却した。三井財閥とEALの交渉は一九四八年秋に始まり、一九五〇年末までに蔵書の移管が完了している。事の経緯は、Roger Sherman "Acquisition of the Mitsui Collection by the East Asiatic Library, University Of California, Berkeley"(Journal of East Asian Libraries, No.67, 1982.2) に詳しい。

（5）UCバークレー校図書館検索データベース "OskiCat UCB Library Catalog"(http://oskicat.berkeley.edu/ 最終閲覧日二〇一五年一二月二〇日) 等がある。

(6) 庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』（鼎書房、二〇一五）には「直筆原稿・草稿類所蔵先一覧」が付され、芥川の生原稿の所蔵先の一覧が記されているが、「母」の原稿についての言及はない。

(7) 欄外の下部左寄りに「十ノ廿　松屋製」と青く印字され、マス目部分は破線になっている。角田忠蔵『芥川龍之介自筆未定稿図譜』（大門出版美術出版部、一九七一・九）で行われた十六分類に従えば「第一号型」である。

(8) 一行目三マス目から五マス目、二行目三マス目から五マス目の計六マスを使って、「母」という題字が大きく書かれている。その脇に、赤ペンで「―2―」と書きこまれている。

(9) 三行目一二マス目から二〇マス目に、マス目を横断して署名され、その脇に赤ペンで「―3―」と書かれている。

(10) 数字は七マス目に書かれ、脇に「―5?―」と赤ペンで書込みがある。

(11) 赤インクで訂正されている。

(12) 「〔相〕不相変」の訂正は赤インクで成されている。編集者に拠るものか。

(13) 原稿中でこの部分のみ「眼」が「目」と表記されている。その他は、すべて「眼」の表記。初出では、すべて「眼」に統一されている。

(14) 原稿用紙の終わりまで、十七マス分あるが、この後は空白のままになっている。

(15) 「き続〔□〕けてゐる。……」の部分は、原稿用紙の欄外に書かれている。第一章の末尾のためか。

(16) 七マス目に書かれ、その脇に赤インクで「5」と書かれている。

(17) 原稿用紙の欄外上部に、赤鉛筆で「中公小説第六ノツヅキ」と書き込みがある。

(18) 以下、原稿用紙末までの三行と十一マス分は、空白のままとなっている。

(19) 以下、原稿用紙末までの二行と十八マス分は、空白のままとなっている。

(20) 原稿用紙の欄外上部に「中央小説第六ツヅキ（完）」

と赤インクで書き込みがある。

(21)「〰〰」は二マス分の波線。直前の「?」の部分より、書きあぐねたように見える。

(22) 初め、

「今年は余計――――」

女は

となっていたところを修正したので、会話追加分の「あら、泣いてゐるようでござ」の「ござ」が、次行の「女は」のマス目脇に書かれている。

(23) 以下、原稿用紙末までの六マスと一行は、空白のままとなっている。

(24) 以下、原稿用紙末までの九マス分は、空白のままとなっている。

(25) 神田秀美「芥川龍之介「母」試論――〈不可知〉を指向する作品トリック、テクニック――」(『青山語文』一九九九・三)、鈴木論文(註(3)参照)に詳しい。

(本学専任講師)